

遠田勝著
『〈転生〉する物語』

—小泉八雲「怪談」の世界—

（新曜社、二〇一一年）

稲賀 繁美

著者会心の著作だろう。迂闊に内容に踏み込んで、まだ本書を繙いていない読者の楽しみを奪うのでは、と心配になる。それほどまでに謎解きがつぎつぎと認識の扉を開いてゆくさまが心地よい。平川祐弘氏（一九三一年生）が主導されたラフカディオ・ハーン（一八五〇—一九〇四年）研究が、それへの執拗な反論も巧みに取り入れつつ、選り抜きの研究者を巻きこむことで成し遂げた達成の水準を、見事に証拠だてる著作だ。とはいえ、おそらく他の専門領域から見れば、この完成度が逆に方法論上の限界のみならず、素材の扱いに関する不満に繋がる懸念もある。江戸文藝、民俗学、口承伝承論、女性論他の専門家から、いかなる裁定が下されるか注目したい。

まず庄巻は、冒頭書き下ろしの「小泉八雲と日本の民話——「雪女」を中心に」だろう。あまりに著名な「雪女」Yuki-Onnaはいかなる口承伝承を下敷きにしていたのか。多くの研究者を

悩ませてきたこの難題に、著者はおもね見通しを与える。外国人作家による短編の「再話」なのだから、当然その原型となる口承が存在するはずだ。『怪談』Kwaidan（一九〇四年）の序文にも、武蔵國西多摩郡調布村の農夫の語り、と注記がある。著者は小松和彦（一九四七年生）主導の国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」も参照しているが、そこには「白馬岳の雪女郎」をはじめとして、これに類した口碑伝説が数種確認され、そこからハーンが取材したのでは、という蓋然性が想定されてくる。

ところが、ここにはある思い込みが巣食っていた。すなわち、口承が追って文字化されるという順序への信仰であり、口碑伝承者には文学的な素養はないものとする前提である。著者は、参照したデータベースには民俗学関係の雑誌記事からの収録が多い反面、文学関係は脆弱なことに気づいていた。民俗学関係の採取事業は、柳田國男（一八七五—一九六三年）の『遠野物語』（聚精堂、一九一〇年）が二〇一〇年に刊行百周年を迎えたことからわかるとおり、けっして明治時代以前の無文字社会の言い伝えを文字に起こしたわけではない。ハーンの「雪女」は一九〇四年の作であり、近代民俗学による学術的口承採取作業が本格化する以前の、古層の記憶に属していた。

ここから、筆者の追跡は通常の道筋とは逆の方向を辿り始める。青木純二（一八九五年—？）が白馬岳山麓で初めて「雪女」を「採話」したのは一九三〇年、『遠野物語』の採話者、佐佐木喜善（一八八六—一九三三年）の『聴耳草紙』（三元社）が一九三一年だから、それより早い時期の「採取」である。だが青木

の採取したテキストをハーンのそれと比較しさえすれば、事は露見したに等しい。青木の採取した物語は、ハーン作品の高濱長江訳（『怪談』すみや書房、一九一〇年）に基づく焼き直しと判明する。そもそも白馬採話に見える「箕吉」「茂作」という名は、ハーンが自らの創作の途中で補った名前に他ならない。創作から剽窃のうえ口承が捏造されたと形容しては、「詐欺的行爲」（二二頁）と断ずるに等しいが、実際には口碑採取の現場では、「机上の引き写し」という転倒が発生していた。それが伝承記録の「真実」だった。もともと「武蔵國」の伝承、というのが、ハーンの「傑作」とつての唯一といつてもいい弱点（三九頁）にも等しかった。この弱点を見事に補った「白馬岳」の雪女伝説は、まんまとハーンの「雪女」の原拠として市民権を得てゆくのである。ここには、神話・伝承を、文学以前の潜在態として復権してきた学術の盲点が暴かれている。

「こういうことだったのかと、調べたわたし自身が、呆然としている」（五〇頁）。民話採取という作業は、民話を聴き取りたいという以上に、読みたいという欲望のなせる技だった。そしてこれは、アフリカなどでの神話採取の場合にも頻発していた倒錯だったはずである。「民話」とは田舎の素朴な口承伝承などではない。「民話を発見し」「民話の命」を「蘇らせよう」とする使命感は、あくまで二十世紀になって、「近代化」の世相のなかで流行をみた「都市現象」だった。敗戦後にその中心を担ったのが松谷みよ子（一九二六年生）と「民話の会」だった。そしてその象徴となったのが「夕鶴」（『婦人公論』一九四九年一月、単行本は弘文堂、一九五〇年）だが、実は、この民話劇を流行

させた木下順二（一九一四—二〇〇六年）の父、彌八郎は熊本時代のハーンの学生であり、順二には「ラフカディオ・ハーン——その研究」という、熊本時代のハーンに関する「必読文献」（五六頁）があった。指摘されれば歴然たるこうした脈絡は、なぜいままで見落とされてきたのか。

これはもはや小泉八雲研究にとどまる問題ではない。民話にまつわる「近代の神話」の一角が崩され、その実態が露呈されているからだ。遠田は、その一連の動きに植物栽培の用語を当てて「戻し交配」（六〇頁）による品種改良と呼ぶ。「雪女」は、大人相手の「情話」（六二頁）の性格を失い、「童話」（六五頁）へと脱皮して若返る。続く紙面は、民話を「はるか昔から民間に伝わる物語」とみなす「神秘のヴェール」から引き剥がし、むしろそれが戦中から戦後の世相を反映しながら再話され、再生された反芻の営みだったことを解明する。『鈴木サツ全昔話集』（小澤俊夫・荒木田隆子・遠藤篤編、同刊行会、一九九三年）が模範として検討される。たしかにサツに遠野の「雪女の話」を語らせたのは、「近代的なマスメディアからの需要と圧力」（一二五頁）だった。だがサツはそこで、すでに半世紀以前も昔の「本物の遠野綾織町の方言世界」という「すでに失われた言語空間への廻行」（二六頁）を試みている。「過去のわたしたち」（二九頁）の再発見を目指す語り部。そこに遠田は、再話によって蘇る昔話の実相を確かめる。論文の見事な末尾は、読者各自お読みいただきたい。

本書の題名「転生」する物語は、第一部に見たように「雪女」の転生にも認められるが、第二部では、ハーンの「お貞の

に遡って上田秋成（一七三四—一八〇九年）ほかの怪異談の嫡流に位置づけることもできよう。勸善懲惡や因果報恩の外皮の下に、女性の怨念を口実とした残酷趣味を盛り込んだ伝統の側から再点検すれば、ハーンによる女性の転生がいかなる折衷と断絶を含むものかにも、おのずと異なつた視界が開かれるに違いない。ここでは「怨魂借體」（鴻齋）から「お貞」（ハーン）へ、さらには漱石『夢十夜』の第一夜を経由して「坊つちゃん」（『ホトギス』一九〇六年四月）の「清」にいたる「転生の女」の系譜を確認して、本書第三部に進みたい。先行研究への卓抜な批評的まなざしや、縦横な仮説提起の筆捌きを堪能させるのは、橋掛かり・中入りの論文群といつてよいからである。

第三部「仲介者ハーン」は三つの論文からなる。まず『古今著聞集』（一二五四年）を下敷きにする「おしどり」Oshidoriは、連れ合いを殺された雌鳥が狛師の目前で自害を遂げる。この場面がフローベール Gustave Flaubert（一八二〇—一八八〇年）の短編「聖ジュリアン」La Légende de saint Julien l'Hospitalier（『三つの物語』Trois Contes 所収、一八七七年）を参照したとの推測は平川祐弘にあるが、いかに西欧の読者向けの翻案とはいえ、この雌鳥の行動に違和感を抱く読者は少なくない。そこに遠田は新たな解釈を提起する。雌鳥の自裁には、ハーンの妻・節の祖父、鹽見増左衛門の諫死という秘話が投影されていたのではなかったか、と（一八五—一八六頁）。さらにハーンは天津事件の際に自刃してロシア皇帝に詫言た烈女の実話を「勇子」Yukoに描いているが、ここでもハーンが勇子のうちに自らの妻を重ね合わせに見ていた可能性が示される。勇子を士族の娘

話 The Story of O-Tai が語る転生の物語そのものが、漱石の『夢十夜』（春陽堂、一九一〇年）の第一話に転生する、といった（すでに平川祐弘が提唱していた）二重箱の構造にも、探索の触手が伸ばされてゆく。『夢十夜』の研究ひとつとつても、いかにこれまでの近代文学研究者たちが、気ままな感想を書きつけたただけだったかが暴露される。と同時に一九九六年の平川論文（これは評者も別途書評したので省略する）によりハーンの種本と判明した『夜窓鬼談』上下（吾妻健三郎、一八八九・九四年）の著者、石川鴻齋（一八三三—一九一六年）が、その後の張偉雄（一九五五年生）ほかの研究によって復権をとげ、ロバート・キャンベル Robert Campbell（一九五七年生）校注により二〇〇三年には岩波書店の『新日本古典文学大系』に収録されるに至っている。漢文で書かれた明治の文学がいままで国文学研究の世界から排除されていたことが、ここから逆照射され、文学享受の実相が見落とされてきた様も見えてくる。

もともと、鴻齋の男尊女卑で儒教道德の教訓という枠組みに忠実な幽魂譚は、現在の女子学生からは拒絶された、と遠田は授業での経験をもたず（一五九頁）。とはいえ清の初代駐日公使団や黄遵憲（一八四八—一九〇五年）による『日本國志』日本雜事詩編纂にも参画していた鴻齋を、清末明治の文学圈（一六三頁）の一員として遇したならば、従来の日本語文学の枠組みに収まらぬ歴史的現実が再発見されよう。また十九世紀の日本文学という視野を導入すれば、鴻齋の倫理的判断は、むしろ山東京傳（一七六一—一八一六年）から曲亭馬琴（一七六七—一八四八年）、柳亭種彦（一七八三—一八四二年）さら

と「誤記」したハーンの「誤認」あるいは「歪曲」（一八九頁）ゆえに、大田雄三（一九四三年生）は作品の信憑性そのものを疑問視するが、この説に対して遠田は、そこにこそ小泉家の婿養子となったハーンの視線、士族の娘たる者の「意地と覚悟」（九三頁）への理解が示されている、と巧みに切り返す。「おしどり」というフィクションにハーンが託したものこそ、日本女性の貞淑な内面に滾る激情だったのだ、と。

つづく「人形の墓」Ningyō no Haka は、熊本時代にハーンが雇い入れた子守娘の身の上話を、門つけの話に書き改めたものと推定される小品だが、祖母が狂乱する場面に能の後シテの舞を見る平川説を受け継いだ遠田は、そこに語り手の憑依ゆえのほかならぬハーンが演じている、と主張する。ポール・クロール Paul Claudel（一八六八—一九五五年）が「何者かが現れる」のを「待つためにそこに」居ると形容したワキ（二〇二頁）、アーサー・ウェイリー Arthur Waley（一八八九—一九六六年）が「a silent witness」と呼んだワキ（二〇三頁）、奇しくもその役割を受け持つ羽目になった異人作家は、諸国一見の僧よろしく、慰霊と鎮魂の儀礼の成就に「劇的」に貢献したことになる。

上田秋成の名作「菊花の約」を下敷きとする「守られた約束」と対をなすかたちで『日本雜記』A Japanese Miscellany（一九〇一年）におさめられたのが「破られた約束」Of a Promise Broken だった。後妻は娶らぬとの約束を夫から取り付けて臨終を迎えた妻が、夫の違約に怒り、後妻を殺害する凄惨な物語であり、霊の妄執に迫る執拗な描写には、醜惡との印象を漏らす批

評家すらある。だが遠田は先行する章の「複式夢幻能」構造を踏まえて、ここでも卓越した読みを提唱する。即ち――

「破られた約束」では、物語の結末に話者が現われて、「This is a wicked story」だと感想を述べる。違約を犯した夫に祟るならまだしも、若い後妻には何の罪もないではないか、というわけだ。この「声」が西洋社会の論理と倫理とを代弁した作者ハーンの良識であることは、疑いあるまい。ところがそれに対して、native informantと想定される男が「それは男の理屈で、女の気持ちは、それじゃすまない」（二二六頁）と反駁する。それに対して、話者ハーンは「He was right」と納得してみせ、物語は終わる。ここには何が発生しているのだろうか。

「因果話」Ingwa-Banashiにも、体から切り落とされた手が、なおも後妻の乳房を弄る描写があり、牧野陽子（一九五三年生）はモーパッサンGuy de Maupassant（一八五〇―一九三三）からの借用を推定している。これらの類話では、いずれも違約を犯した男の罪は問われず、死霊と化した前妻の後妻に対する嫉妬ばかりが荒れ狂う。話者としてのハーンの「裁きの天秤はバランスを狂わせがちであったように思う」と遠田は「多数の読者の不満にも同意」（二三四頁）してみせ、そのあとで、この謎にひとつの回答を提示してみせる。そもそも作者自身が舞台のワキに闖入して「物語の結末はおかしい」と言い募るというのは、いかなる事態だろうか。

だが本書をここまで読み進めてきた読者には、既にその答えも、うつすらと見えてくる。〈転生〉する女性の物語をつぎつぎに転生させたハーンにとって、その根源に存在した女性。その

前半生に苦難を舐めたハーンにとって、禁じられた嗜虐への陶醉と自己懲罰とが渦巻く絵巻こそ『怪談』の世界であり、そこからの救済＝自己昇華を彼に許したのが、複式夢幻能のワキの位置に、異国の立会人として自らを召喚するという、日本体験だったとは言えまいか。遠田説に導かれた評者は、ここに、ハーンから小泉八雲への、母の〈転生〉の印を見届けたい。

不在の形象こそ、ハーンが直接触れることは忌避しつつも、求め続けたものではなかったか。

それは、「臉の母」などという陳腐でなま易しい表象ではない。父に捨てられコルフ島に狂死した母の面影こそ、『怪談』を通じて紡ぎだされた怨霊の正体だった（二二六頁）。この推論を述べる遠田の行文は、味読に値する。そのうえで評者として蛇足を加えたい。父を奪った女やその子供に報復を加えるという無理無体は、無念の死を遂げた自らの母、その不在の存在を慰撫するための禁じられた衝動として、ハーンの創作の根源に封印されていた。若き日のハーンがシンシナティで新聞記者として描いた凄惨な実録殺人事件の数々には、制御不可能な嗜虐趣味が露呈している。作者の意識の底に蠢く母の無念への憤怒は、反社会的な攻撃性の牙すら剥く。だがそうした禁忌が、日本の江戸文藝では、恰も道徳に適ったものであるかのごとく、陰惨な描写をも憚らず、許容されていた。その鷹揚さに驚き、猟奇の極致に同調すればこそ、ハーンは「破られた約束」の結構の内に自らの遺恨のおぞましき抛り所を求めつつ、しかし復讐の道徳観には疑問を呈する外国人という別人格を、周到にも舞台のワキに確保したのではなかったか。

凄惨な物語を語りつつ、そこに疑念を呈したうえで、結局、自分には異郷である日本土着の解釈を是としてみせるハーン。遠田はそこまでは踏み込まないが、ここには、表向きはおよそ納得し難い（言わば野蛮な）復讐の倫理をあえて甘受してみせる越境の身振りをとおして、自らの悪魔祓いと魂の浄化を試みる作者の「自己分裂」の姿も透視できよう。「前妻の子」として

比較文學研究

特輯 萩原朔太郎の風景

〔巻頭言〕我としき人しなければ
—— 王朝歌人と「アイデンティティー」…………… 池田美紀子 (1)

「遊園地にて」テキストの空間を歩けば…………… 榊 敦子 (6)
〈遠さ〉あるいはアウラの向う側へ

—— 前期『月に吠える』の詩の風景…………… 坪井 秀人 (17)
「猫の死骸」の風景 —— 非在の時間の豊かさの中で…………… エリス 俊子 (35)
ことばの風景 —— 萩原朔太郎「春の實體」を読む…………… 菅原 克也 (49)
萩原朔太郎「まどろすの歌」の風景…………… 小川 敏栄 (69)

阿川弘之における原爆の主題と「アメリカ」…………… 金 志 映 (82)

円熟期の島田謹二教授 —— 書誌の側面から (15)…………… 小林 信行 (106)
第十回島田謹二記念学藝賞について…………… (132)

〔書 評〕
島民の視点 —— *Nanyo-Orientalism: Japanese Representations of the Pacific* (Naoto Sudo)…………… 中村 和恵 (136)
『「外部」遭遇文学論 —— ハーン・ロティ・猿』(大貫徹)…………… 西川 正也 (141)
『「転生」する物語 —— 小泉八雲「怪談」の世界』(遠田勝)…………… 稲賀 繁美 (150)
『郁達夫と大正文学 —— 〈自己表現〉から
〈自己実現〉の時代へ』(大東和重)…………… 西原 大輔 (155)

〔展覧会カタログ評〕
「渋谷ユートピア 1900-1945」展…………… 任 グハム (161)
二つの川村清雄展 —— 「維新の洋画家 川村清雄展」と
「もうひとつの川村清雄展」…………… 申 政 正 (165)

〔Le Rond-Point〕
韓程善氏博士論文「江戸川乱歩と映画 —— 1920 年代日本
文学における映画受容の文脈から」審査結果の要旨…………… 今橋 映子 (173)
韓程善氏博士論文公開審査会傍聴記…………… 堀江 秀史 (175)

外国語要約…………… (1)

東大比較文学會

比較文學研究

第九十八號

特輯 萩原朔太郎の風景

二〇一三

比較文學研究 98 號

2013 年 10 月

東大比較文学會編輯・發賣元(株) すすさわ書店・定價: 本体三、八〇〇圓(税別)



9784795402867



1923390038004

ISBN978-4-7954-0286-7 C3390 ¥3800E

定価(本体3,800円+税)

すすさわ書店

No. 98 ISSN 0437-455X October 2013

Hikaku Bungaku Kenkyu
Studies of Comparative Literature
Special Issue: Landscapes of Hagiwara Sakutarō

Foreword
Ikeda M.: "As There Is No One Just Like Me in the World": Japanese Poets and
Their Identity in the Period of Court Rule…………… (1)

Sakaki A.: Walking in the Space of "At Luna Park"…………… (6)
Tsuboi H.: Über *Ferne* oder über *Aura*: Die Landschaft der frühen Werke
in Hagiwara Sakutarō's Gedichtsammlung *Tsuki ni Hoeru*…………… (17)
Ellis T.: The Poetic Landscape of "The Corpse of a Cat":
In the Richness of the Non-Present…………… (35)
Sugawara K.: Constellation of Words: Reading "The Essence of Spring" by
Hagiwara Sakutarō (1886-1942)…………… (49)
Ogawa T.: Three Sceneries in Hagiwara Sakutarō's Poem "Madorosu no Uta"…………… (69)

Kim J.: America in Agawa Hiroyuki's Writings about Hiroshima…………… (82)

Kobayashi N.: Dr. Shimada Kinji's Mature Years as Seen through His Writings (XV)…………… (106)
The Tenth Awarding of the Shimada Kinji Prize for Comparative Literature…………… (132)

Reviews
Nakamura K.: *Nanyo-Orientalism: Japanese Representations of the Pacific* by N. Sudo…………… (136)
Nishikawa M.: "*Gaibu*" *Sōgū Bungakuron: Han, Roti, Saru* (Critical Essays on
Encounters with the Outside: Hearn, Loti and the Monkey) by Ōnuki T.…………… (141)
Inaga Sh.: (*Tensei*) *suru Monogatari: Koizumi Yakumo "Kaidan" no Sekai*
("Transmigration" of Stories / Stories of "Transmigration": The World
of Koizumi Yakumo's *Kwaidan*) by Tōda M.…………… (150)
Nishihara D.: *Ikutappu to Taishō Bungaku: (Jiko Hyōgen) kara (Jiko Jitsugen) no*
Jidai e (Yu Dafu and Japanese Literature in the Taishō Period: From the Era of
"Self-Expression" to the Age of "Self-Realization") by Ōhigashi K.…………… (155)

Exhibitions and Catalogues
Yim D.: Shibuya Utopia 1900-1945…………… (161)
Shin M.: Two Exhibitions on Kawamura Kiyoo: "Kawamura Kiyoo: The Oil Painter of the
Meiji Restoration" and "Another Story of Kawamura Kiyoo: Two Collections of
Kashima Torakichi and Aoki Tōsaku"…………… (165)

Le Rond-Point
Imahashi E.: Examiners' Comments on Han Jung Sun's Doctoral Thesis, "Edogawa
Rampo and the Cinema: The Influence of Films on Japanese Literature in
the 1920's"…………… (173)
Horie H.: Ms. Han's Thesis Defense…………… (175)

Abstracts…………… (1)

Society of Comparative Literature
The University of Tokyo
Todai Hikaku-Bungaku-kai